The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	女子青年における「‘つながり’の感覚」から見た死のイメージ
Author(s)	隣, 祐理子
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1997, 2, p. 2-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4174
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

女子青年における「‘つながり’の感覚」から見た死のイメージ

隣　祐理子

<問題>

死は人生の‘総決算であり’（柏木、1986)、ひとは生きてきた様に死んでゆく。死のイメージ研究はこれまで、発達的視点や宗教の有無などの諸要因から分析が行われてきた。しかし臨床的知見からは、家族の死が遺された家族に及ぼす影響は、生前の家族関係に依存することが知られている。このように、死のイメージを考察するには、現在の人間関係の要因を無視することはできないと考えられる。特に信頼感は、Erikson が「人生の中で発達させるべき精神的健康の第一の構成要素」としている様に、人間関係上で最も根本的な感情の一つである。Erikson (1959)によると、「信頼」という状態は、他者との同一性と連続性、及び自分自身への信頼を意味している。Rotter (1967)を始めとする信頼感の実証的研究からは、信頼感に複数次元が存在することが示唆されており(e. g. Wright & Tedeschi, 1975)、日本人における研究では、高校生を対象とした信頼感尺度研究より、「不信」因子、「自分への信頼」因子、「他人への信頼」因子が抽出されている（天貝、1995)。また大学生を対象とした研究では「基本的信頼感」因子と「対人的信頼感」因子が抽出されている（谷、1995)。ところで日本人は‘和’を大切にする民族と言われるが、こうした和を保つための距離感覚は、身体レベルのものである（樋口、1992)。よって日本人の信頼感を考える際には、人の暖かさや距離感などといった身体感覚上の連続性の側面をも見逃すことはできないと考えられる。そこで、本研究ではこうした連続性の側面に注目して「‘つながり’の感覚」尺度を構成し（研究１)、「‘つながり’の感覚」が死のイメージに及ぼす影響について、探索的に検討した（研究２)。

研究１「‘つながり’の感覚」尺度の構成

方法

1)「‘つながり’の感覚」尺度項目の収集

ＴＫ式新親子関係検査、親子関係診断検査、RLI; Reasons for Living Inventory (Linehan, et al., 1983) を参考に、ふさわしいと考えられた28項目からなる質問紙調査票を新たに作成した。項目群は、1.親子・家族関係に関する質問　2.一般的他者に関する質問　の２群にあらかじめ分けて収集された。

2)項目の選定

調査時期　1996年6月

調査対象　大阪府下女子大学生71名

実施方法　質問紙調査が、授業時間内に担当教官により実施された。回答は「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの６件法で評定を求めた。また「人とのつながりを感じるときはどういう時か」について自由記述を求めると同時に、表現の意味が分からない項目も指摘してもらった。その結果、30項目に整理された。

3)因子分析に基づく項目の選定
調査時期　1996年7月～9月
調査対象　大阪府下女子大学生および女子専門学校生計185名
質問紙　　尺度項目と共に、死に対する態度に関する質問項目として　Q１死別体験の有無、Q２死について考える頻度（１よく考える　２しばしば考える　３ときどき考える　４あまり考えたくない　５あまり考えない)、Q３身近な人と「死」をオープンに話せるかどうか（１オープンに話をしてきた　２何かあった時だけ話をしてきた　３めったに話をしなかった　４話をしないように避けてきた　５よく分からない）の３項目を加えた。

結果　まず、全30項目に対し共通性の初期値を１とした主成分分析を行い、Varimax 回転を施した結果、４因子が抽出された。回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の負荷をもたない項目が削除され、27項目が選定された(table1)。第Ⅰ因子は‘親や家族と話し合った経験はない’や‘私は家族に愛されていない’などの反転項目9項目からなり、「親子・家族関係の希薄さ」因子と命名された。第Ⅱ因子は‘人と話していても疎外感を感じることがある’や‘自分の事を分かってくれる人はいない’などの反転項目8項目からなり、「他人とのつながりの希薄さ」因子と命名された。第Ⅲ因子は‘生きていくには人との協力が必要だ’や‘親しい人が死んでも、心がつながっていると思う’などの６項目からなり、「他人とのつながり」因子と命名された。第Ⅳ因子は‘互いを理解し合えた経験がある’や‘何も言わなくても気持ちを理解してもらったことがある’など４項目からなり、「抱え(holding)」因子と命名された。

3)信頼性の検討　項目全体に対しCronbach のα係数を算出したところ、30項目全体に対して.85であったため、内的整合性が高いことが確認された。

4)妥当性の検討　Erikson の基本的信頼感(basic trust)はH. S. Sullivan の安全感(security)と同義だとされている（精神医学事典）が、Sullivan によると、Security が奪われて生まれる不快感が不安であるとされており（同上)、基本的信頼感と不安は負の相関があると考えられたため、STAI（状態特性不安テスト）を用いて「‘つながり’の感覚」尺度総得点との相関係数を算出し、併存的妥当性を検討した。その結果、状態不安(.40)、特性不安(.33)双方とも１％水準で有意であり、基準関連妥当性が確認された。

5)各因子の死に対する態度との関連
　各因子の標準因子得点を従属変数、死に対する態度に関する項目を独立変数(table 2.)とする一元配置分散分析を行った(table 3.)。その結果、Q１死別体験の有無　及びQ３身近な人と「死」をオープンに話せるかどうか　については有意差は見られなかったが、Q２死について考える頻度　については「他人とのつながりの希薄さ」($F(4,134)=3.15$, $p<.05$) 及び「抱え」($F(4,134)=2.48$, $p<.05$)の因子得点について群間に有意差が見られた。LSD法を用いた多重比較の結果、「他人とのつながりの希薄さ」因子については「あまり考えない」と「よく考える」「しばしば考える」との間および、「時々考える」と「しばしば考える」との間に有意な差が見られた。「抱え」因子については、「ときどき考える」

「あまり考えたくない」と「しばしば考える」との間に有意な差が見られた。

table1. Varimax 回転後の因子パターン　（＊は逆転項目）

項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
A. 親子・家族関係に関する質問					
8. 親や家族と話し合った経験はない＊	.799	.061	.083	−.055	.651
10. 私は家族に愛されていない＊	.784	.115	−.047	.222	.679
11. 自分の成長を見守る人はいない＊	.726	.141	−.067	.232	.606
9. 親に成績や作品を誉められたことがない＊	.654	.079	.075	.009	.440
12. 私は家族が嫌いだ＊	.653	.278	.005	.129	.520
5. 親に挨拶しても返事されない事が多かった＊	.582	.257	−.001	−.046	.407
6. 親と一緒に食事をした事がない＊	.537	.010	.130	−.306	.399
4. 小さい頃、学校の事を尋ねられた経験がない＊	.523	.087	.078	−.032	.288
7. 親を遠いと感じたことがある＊	.521	.134	−.120	−.043	.305
B. 一般的他者に関する質問					
21. 人と話していても疎外感を感じることがある＊	.118	.748	.029	.014	.575
19. 自分の事を分かってくれる人はいない＊	.227	.730	.114	.135	.623
23. 人と対等に立てないような気がする＊	.208	.700	−.062	.048	.539
27. 人は信頼できないものだ＊	.019	.605	.168	.133	.412
20. 自分の意見は取り入れてもらえないと思う＊	.281	.604	.110	.156	.481
24. 親しい人でも自分と遠いと感じる＊	.113	.604	−.044	−.074	.385
26. 誰も私を頼りにしてくれる人はいない＊	.209	.584	.906	.285	.476
28. 早く死にたいと思う＊	.020	.519	.199	−.287	.391
15. 親しい人が死んでも、心がつながっていると思う	.013	.044	.753	.098	.578
14. 生きていくには人との協力が必要だ	.042	.053	.730	.300	.627
18. 自分が死ぬ時には誰かに側にいて欲しい	−.020	−.013	.692	−.013	.480
17. 人の心の暖かみを感じる事がある	.017	.254	.641	.395	.632
16. 遠く離れていても会おうと思えば会える人がいる	.031	.037	.621	.176	.419
13. 人と協力し合って物事を成し遂げたことがある	.050	.226	.580	.216	.438
29. 互いを理解しあえた経験がある	.026	.041	.149	.798	.661
30. 何も言わなくても気持を理解してもらった事がある	.017	.034	.270	.755	.643
25. 短所を含めて自分を認めてくれる人がいる	.031	.097	.208	.657	.485
22. 困った事があると頼れる人がいる	−.009	.068	.243	.599	.422
固有値	6.04	3.80	2.15	1.57	12.56
寄与率（%）	22.4	14.1	8.0	5.8	50.2

table 2.　「死」に対する態度の分布（%）

Q1死別体験	Q2死について考える頻度		Q3身近な人と死をオープンに話せるか	
1ある 160(86.4)	1よく考える	15 (8.1)	1オープンに話をしてきた	31(16.8)
2ない 23 (12.4)	2しばしば考える	27(14.6)	2何かあった時だけ	91(49.2)
3不明　2　(1.1)	3時々考える	72(38.9)	3めったに話をしなかった	35(18.9)
	4あまり考えたくない	33(17.8)	4話をしないよう避けてきた	4 (2.2)
	5あまり考えない	35(18.9)	5よく分からない	21(11.4)
	6不明	3 (1.6)	6不明	3 (1.6)

table 3.　死について考える頻度ごとに見た各因子得点の平均と標準偏差

	よく考える	しばしば	時々	余り考えたくない	余り考えない
「親子・家族関係の希薄さ」得点	-.683 (.664)	.168 (.931)	.067 (1.16)	-.028 (.945)	.044 (.846)
「他人とのつながりの希薄さ」得点	.345 (1.14)	.458 (1.17)	-.034 (.928)	-.061 (.916)	-.430 (.835)
	余り考えない＜（よく考える・しばしば考える）；時々＜しばしば				
「他人とのつながり」得点	.004 (1.49)	-.078 (.978)	-.093 (1.11)	.178 (.668)	.102 (.809)
「抱え」得点	.089 (1.28)	.540 (.922)	-.130 (.977)	-.282 (.903)	-.007 (.978)
	（時々・余り考えたくない・余り考えない）＜しばしば				

注）多重比較により有意な差が見られた箇所について、不等号で示した。　また、以下「つながりの希薄さ」尺度得点として記す場合は、値が高いほど希薄であるように数値を変換した。

6)各因子の「臨床群」と「非臨床群」における違い

「‘つながり’の感覚」尺度項目の一つ以上に「全く当てはまらない」「殆ど当てはまらない」とつけた者を「臨床群」、それ以外の者を「非臨床群」と操作的に対象者を2群に分類した（臨床群73名、非臨床群69名）。各因子の標準因子得点を従属変数とする分散分析を行った結果、「親子・家族関係の希薄さ」因子を除く3因子得点において群間に有意差が見られた(table 4)。「他人とのつながりの希薄さ」の因子得点については臨床群の方が非臨床群よりも有意に高く($F(1,140)=9.55$, $p<.01$)、「他人とのつながり」および「抱え」因子得点については、非臨床群の方が臨床群よりも有意に高かった(それぞれ$F(1,140)=7.64$, $F(1,140)=11.05$, $p<.01$)。また、「親子・家族関係の希薄さ」因子得点においても10%レベルで傾向が見られ($F(1,140)=3.51$, $p=.06$)、臨床群の方が非臨床群よりも高い傾向が見られた。

table 4　「臨床群」及び「非臨床群」における各因子得点の平均と標準偏差

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
臨床群	.151 (1.24)	.245 (1.11)	-.220 (1.26)	-.262 (1.23)
非臨床群	-.160 (.64)	-.259 (.79)	.233 (.53)	.277 (.57)

研究２　「‘つながり’の感覚」と死のイメージとの関連

目的　①「‘つながり’の感覚」尺度および②九分割絵画法（森谷、1983）を用いて、信頼感の連続性の側面が、絵によって表現された死のイメージとどのような関連を持つかを探索的に検討する。

調査時期　①1996年5月　②同9月

調査対象　大阪府下保育系女子専門学校生（計89名）。

結果

「‘つながり’の感覚」尺度については、各項目の分布を見たところ、5項目を除く22項目が明らかなＬ字型分布を示したので、‘つながり’の感覚が薄い順から6％（5人）以内に含まれる項目に一つ以上当てはまるとした者を「臨床群」、その他を「一般群」として操作的に対象者を２群に分類した。絵画については、森谷(1983)の理論に従い、‘拡散的イメージをまとめる中心的なものが出やすい’とされる第９セルについて、空白を除くものを雨宮(1996)の「死のイメージ」第Ⅰ因子（「否認」因子）10項目と第Ⅱ因子（「受容」因子）10項目を用い、心理系大学院生３名に評定してもらった。形容詞ごとに、３人のうち２人以上が「当てはまる」とした絵の割合を臨床群及び非臨床群ごとに算出し、グラフに示した（fig.1、fig.2)。２項検定の結果、「不幸な」($z=1.74$ $p<.05$)、「憂鬱な」($z=2.03$ $p<.05$)、「穏やかな」($z=2.75$ $p<.01$)、「愛に満ちた」($z=3.65$ $p<.01$)、「ゆったりした」($z=2.75$ $p<.01$)で有意差があり、「臨床群」の方が「非臨床群」よりも死のイメージを不幸で憂うつと捉え、また「非臨床群」は、より穏やかで愛に満ちたものと捉えていることが分かった。

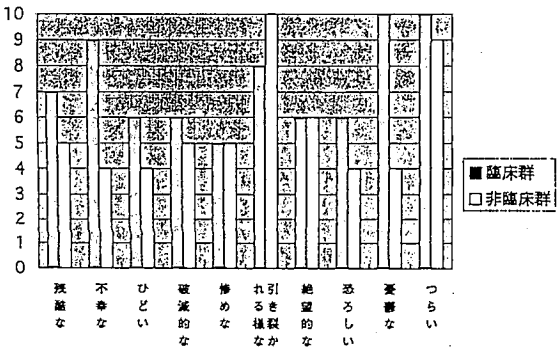

fig.1 否定的形容語における二群の違い

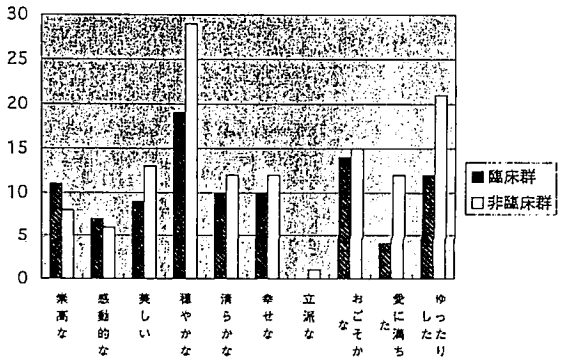

fig.2 肯定的形容語における二群の違い

次に９つのセルの中で友人、家族、ペット、愛する人といった‘特定可能な’関係にあるものの描かれていたセルの数を調べた(Fig.3)。「関係」の描かれたセルが１つ以上あった群となかった群、及び臨床群と一般群についての2×2のχ^2検定を行ったところ、1%水準で有意な差がみられ（χ^2=6.83)、非臨床群の方が中心的死のイメージとして特定可能な関係にある人間や動物を描く頻度が高い事が示唆された。

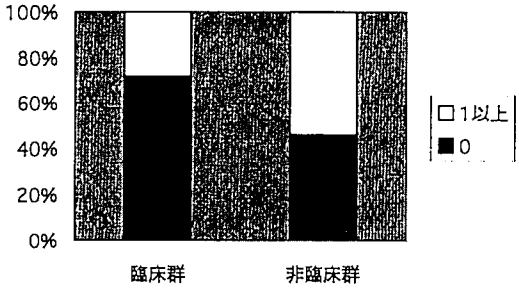

fig.3 「関係」を示すセル数の比較

４．考察

1)構成された「‘つながり’の感覚」尺度の特徴

今回の調査結果では、信頼性及び妥当性の面では十分な数値が出たものの、標準化に向けてのさらなる検討が必要と考えられる。因子分析の結果、「他人とのつながり」因子とは別に「抱え」因子が抽出され、互いを理解し合ったり、短所を含めて認められるということは、心のつながりとは少し次元がずれる事が分かった。この違いについての検討も、今後の課題である。

2) 死を考える頻度と‘つながり’の感覚

今回の結果では、死について考える頻度が高い人の方が、他人とのつながりが薄いと感じていることが分かった。しかし同時に、しばしば死について考える人の方が、考えない人よりも、抱えられる感覚を持つ割合が高いという結果であった。これらの結果は一見矛盾している様であるが、例えば‘つながり’の感覚に対する敏感さという次元を考えると、敏感であるが故に、対人場面で疎外感を感じると同時に、他人とより深い次元において理解し合えたと感じる事があるのではないか、と考えられる。死についてより頻繁に考える人というのは、こうした‘つながり’の感覚により敏感な人なのではないか、という事である。今後は、‘つながり’の感覚に対する敏感さについての検討が必要と思われる。

3)「‘つながり’の感覚」と死のイメージ

他人とのつながりが希薄で、抱えられる感覚の少ない人は、不幸で憂うつな死のイメージを持ち、他人とのつながりを感じ、抱えられる感覚の多い人は、より穏やかで愛に満ちた死のイメージを持つが分かった。しかし有意ではなかったものの‘引き裂かれる様な’という語に関しては、非臨床群の方がわずかに多かった。人とのつながりの感覚の希薄な人は、死に対して否定的イメージを持つが、死に対してそれほど人との別れや‘引き裂かれる’感覚といったビビッドな感覚が引き起こされないのではないか、と推測される。

また、「‘つながり’の感覚」のある人の方が、より頻繁に死のイメージに家族や愛する人、ペットといったものを描く事が分かった。人は誰でも一人で死んでいくのではあるが、例えば臨終の場面で、側に誰か愛する人がいて死ぬのと、たった一人で死ぬのとでは全くイメージが異なる。人とのつながりを感じる人の方が、関係をより多く描くというのは、納得できる結果であろう。

以上より、‘死’は歴史的にタブー視されてきており、忌むべきものとして捉えられることが多いが、人との連続性が感じられるようになると、より肯定的な死のイメージへと変わってゆく可能性があると考えられる。しかし、ここで生じる疑問として自殺の問題がある。つまり、人との‘つながり’を感じる人は、肯定的「死のイメージ」を持つので、自殺へと導かれやすいのではないか、という矛盾に関する疑問である。確かに近年の若者の自殺には、現実の世界から逃れ、死を美化して代償満足を得る「憧れ自殺」が多く見られる。この点に関しては、さらなる実証的研究が必要と思われるが、ここでは本間ら(1979)の示唆を抜粋するにとどめる。彼らはアルコール依存者を対象としたYG性格検査の分析の結果、希死念慮を持つ段階では、思考的内向や情緒不安定が現れ、自殺企図の段階では非協調性と気分の変化の激しさが加わり、更に自殺を決行する段階に至ると、攻撃性の強さが大きな決定要因として加わってくるということである。よって人との‘つながり’に対する敏感さという次元を考えたとしても、よりよき関係を持つことへの試行錯誤が複雑になるかもしれないが、人との‘つながり’の感覚が「憧れ自殺」と直接関連するとは言えないだろう。

文献

天貝由美子(1995)　「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」
教育心理学研究43（4）　p364-371

雨宮裕子(1996)　「死の両面性に関する研究」　日本心理臨床学会第15回大会　発表論文集p84-85

Erikson, E. H. (1959)　*Identity and the life cycle.* Inc. Universities Press.
（小此木敬吾訳編　1973　「自我同一性」　誠心書房）

樋口勝也(1992)　「日本人の人間関係」　淡交社

本間修、石川元(1979)　「自殺の予測」　臨床精神医学8,67-72

柏木哲夫(1986)　「死にゆく患者と家族への援助」　医学書院

Linehan, M. M., Goodstein, J. L., Nielsen, S. L. & Chiles, J. A. (1983) Reasons for staying alive when you are thinking of killing yourself: The Reasons for Living Inventory. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 51, 276-286.

森谷寛之(1983)　「子どものアートセラピー」　金剛出版

Rotter, J. B. (1967)　A New Scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, 35, 1-7.

加藤正明　編（1993）　「新版　精神医学事典」　弘文堂

谷冬彦(1995)　「基本的信頼感尺度の作成」日本心理学会第59回大会
発表論文集 p310.

Wright, T. L., & Tedeschi, R. G. (1975) Factor Analysis of the Interpersonal Trust Scale. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 43, 470-477.

（博士課程1年）